

氷ノ山の植物概観

中 西 哲

1964年8月17日より3日間、氷ノ山において県生物学会の夏期採集会が但馬支部の会員のお世話で挙行された。参加者80余名と共に、福定一東尾根一氷ノ山頂上（5万分の1地形図では須賀ノ山）一氷ノ山越一あずきころがし一福定のコース（多くの人は氷ノ山越より尾根どうしに鉢伏山に出て福定のコース）に沿って植物および昆虫採集や植生の観察を行なった。

この時のメモをもとに、氷ノ山の植物および植生の概要を以下に記録する次第である。種名は大井次三郎著、日本植物誌（1953）によった。開花中の植物については種名のあとに（花）、種子、果実をつけているものは（果）、夏枯れの状態のものは（枯）の略字を付した。疑問種については同行の室井綿先生より教示を得たことを記し、ここに謝意を表する。

8月18日7時半宿舎の喜笑旅館（560m）を出発、八木川の上流を渡って、東尾根の北斜面につけられた急な田圃道を登っていく。標高800mぐらまでは猫の額のような水田が階段状に続いて植物も限られている。路傍の草地にヒメジョオン（果）、コアカソ（花）、ヨモギ、ススキ、チガヤ、ヨメナ（花）、アキノキリンソウ（花）、ウツボグサ（花）、オトギリソウ（花）、ゲンノショウコ（花）、キンミズヒキ（花）、ナデシコ（花）、などを見る。小川の岸边では、オタカラコウ（花）、ガマ、コブナグサ（花）など、日陰地にはしばしばジャクシダが特徴ある葉をひろげている。所々にクワの老木やハルニレ、アキニレの残し木がみられる。また但馬地方を基準産地とする刺のないアサクラザンショウ*も散見される。

800mをこえるあたりからは、水田に代ってクワ、コリヤナギの畑になる。あちこちの崖地にはカヤ、ハイイヌガヤ（果）、ツノハシバミ（果）、キブシ、ヤマウルシ、ヌルデ、ガマズミ、ノリウツギ（花）、フサザクラ、ウツギ、ヤマハンノキ、タニツギ（果）や刺の少ないメダラなどよりなる叢林があり、ツタウルシ、クズ（花）、ハンショウヅル、ボタンヅル（花）、ノブドウ（果）、ウチワドコロ、ノササゲ、アオツツラフジ、ツルウメモドキなどのつる植物も多い。ネナシカヅラがクズの葉群にからまりついている所も見うけられる。日陰地にはフシ

グロセンノウが赤橙色の花をつけていたり、カラマツソウ（花）、ヤマブキショウマ（果）、ミズヒキ（花）、ゼンマイなどが目につく。やや向陽地の草地にはマルバハギ（花）、ツクシハギ（蕾）のほかウド（花）、クサボタン（花）、ヤマボクチ、タケニグサ（果）、イタドリ（花）、シロトダシバ（花）、スズメノヒエ（花）などが生育している。谷川ぞいの湿地にはクサソテツ、ツリフネソウ（花）、シシウド（花）、ヒヨドリバナ（花）、ミズホオヅキ（花）、カワミドリ（花）、アブラガヤ（花）のほか、分布が日本海側山地に限られているクロバナヒキオコシが小さい暗紫色の花をつけている。路傍にはオカトラノオ（花）、イノコズチ、ノブキ（花）、ツルボ（花）オオバコ、ヒルガオ（花）、コウゾリナ（花）、ワラビも見られる。

910m付近より尾根までは70~80年生と思われるスキの植林地内につけられた、ジグザグ道を行く。このスキ林に入ると、クロモジ、コバノトネリコ、オオカメノキ（果）、シナノキ、イタヤカエデ、ウリハダカエデ、ハウチワカエデ、ニワトコ、ミズナラ、クリ（果）、ヤマソテツ（胞）、フウリンウメモドキ、ミヤマガマズミ、サンカクヅル、ホオノキなどのブナ帯の植物が多くなってくる。このほか、ヤマアジサイに似て、より大きい葉をもつエゾアジサイや、ウリノキ（果）、ヤマボウシ、ハナイカダ（果）、ツリバナ（果）、クマシデ、ミズキ、リュウブ、クマヤナギ、ムラサキシキブ、ウワミズザクラ、ナナカマドも出現してくる。林床にはチゴユリ、ナガバモミジイチゴ、オオカニコウモリ、コウモリソウ、シオデ、ツルニンジン（花）などが目につく。尾根にたどりつくすこし手前の立枯木にゴトウヅル（果）とイワガラミ（果）が一緒にからみついている。

尾根に出たあたり（960m）では、ブナのほか、ミズナラ、クリ、ヤマナラシ、ナナカマド、ダンコウバイ、ミズメ、トチノキ、アズキナシ、ハクウンボク、コシアブラ（花）、タムシバ、ニガキ、さらに日本海要素のマルバマンサクなどの幼樹が混生して伐採後の二次林を形成している。尾根を登って1000mをすぎるあたりより低木層がネマガリダケで優占されたブナ林が現われてくる。林縁にクマイチゴ、エビガライチゴ、オトコエシ

* 帰路のバスの中でアサクラザンショウの「アサクラ」なる地名の由来について岩谷成彦氏より発問あり、これは養父郡八鹿町の朝倉であることがわかった。

(花)、イヌツゲ、ツルリンドウなどが見られる。1050m付近の北斜面のブナ林にはベニドウドン、コミネカエデ、ヤブデマリ、ナツツバキ、ダイセンミツバツツジなどの低木が散見されるが、南斜面ではネマガリダケが一面に密生し、ほかの植物の生育を拒んでいる。所々ヤマブドウが、そのネマガリダケの葉群上にひろがっている。尾根筋のブナの大木にヤドリギが寄生していたり、チャボスズゴケ、トコブシゴケ、パンダイキノリなどのコケ、地衣類が着生している。やや登ると、路傍にオオイワカガミ、ツルアリドウシ、シシガシラ、ホソバカンスゲ、サルナシがある。このあたり、ウスノキ、ヤマシグレ(果)、ヒメモチ(果)、クロヅル(実)がよく繁茂している。

約1150mの地点に水場があり、ここでしばらく休憩する。水場近くの湿所には、富山県以西より当地方の日本海側の山地にのみ分布するといわれている珍稀なタイムガサがやや盛りの過ぎた黄色い花をつけていた。そのほか、キツリフネ、リュウモンシダ、ジュウモンシダ、ミヤマタニソバも生育している。この付近の約3m程の高さに生い繁っているネマガリダケ群落内をのぞいてみると、ヒメモチ、ツルシキミ、シノブカグマ、ヤマソテツが散生しているだけで、あとは何も見当らない。ただ比較の日当りのよい路傍には、ハスノハイチゴ、コバノフユイチゴ、ユキザサ、ナルコユリ、ツクパネソウ、キクムグラ、クルマムグラ、エゾユズリハなどが生育している。

1370mの地点にある神戸大学のヒュッテのやや上方にある水場で昼食をとる。この付近のブナ林は天然の林相をそなえた、実に立派なものである。それを物語るかのように、ブナの大木の分枝点にヤシビシヤクが着生している。昼食後の休み時間を利用して1地点(標高1375m、方位S22°E、角度約4°のゆるやかな斜面)の植生調査を行なった。高木層(高さ18m、総合被度95%)ではブナ(5)*、ヤマモミジ(+)、亜高木層(高さ9m、被度20%)にはヤマモミジ(2)、低木層(高さ3m、被度100%)はネマガリダケ(5)で完全に占められている。草本層(高さ0.5m、被度30%)にはイヌツゲ(1)、シラネワラビ(1)、ツルシキミ(1)、ヒメモチ(+)、ヤマソテツ(+)、ユキザサ(+)、ホソバノトウゲシバ(+)、イワガラミ(+)、ナルコユリ(?)が出現している。勿論1資料では断言できないが、その組成や構造からみて、佐々木(1964)**のいう日本海側の冷温帯気候下に発達するブナ-ヒメモチ群集にあたる群落であることはまちがいないであろう。この群集の標徴種はハウチワカエデ、オオバクロモジ、チシマザサ、ヒメモチ、ヒメアオキ、エ

ズズリハ、ツルシキミ、ハイイヌガヤといわれ、特に地這性の常緑低木が多いことが大きい特徴となっている。因にこのブナ林のネマガリダケの密度を5ヵ所測定した結果、平均1㎡あたり17本という値を得た。

この湿潤な溪側には、サンカヨウ、エンレイソウ、シラネワラビなど亜高山生の植物が出現してくる。さらにこの上方1400mの地点のスギの林(千本杉と呼ばれている)の湿った林床にもバイケイソウ(枯)、ヤマドリゼンマイなどの亜高山生の植物が見られた。このあたりのスギはアシオスギ(*Cryptomeria japonica* var.

radicans Nakai)で、下枝が下垂し、時に地床に接着した部分から根を出して、1個の独立木に成長していく性質をもっている。これは深い積雪に対する一種の適応形質と考えられ、このアシオスギがブナ林の中に点在するのが、特に氷ノ山、扇ノ山以西の中国地方日本海側のブナ林の特徴と言われている。筆者の1956年の採集行で、このスギの株元に高山のハイマツの株元に出てくるテガタゴケが着生しているのを採集して驚いたこともある。要するに約1400m以上の地帯には、本来中部地方以北の亜高山帯、高山帯に生活の本拠をおく植物が比較的多く、この氷ノ山のフロラを非常に興味あるものになっている。特に頂上近くにある「コセイ沼」の湿原と「コンキ岩」の岩場とは、地形、土壌要因の影響でネマガリダケが被っていないため、このような北方系あるいは高山生の要素の唯一の生育地となっている。もし氷ノ山にこのような立地がなかったならば、これらの植物はネマガリダケの生活力に負けて生存は許されないであろう。

1490mの地点にあるコセイ沼の湿原群落はまわりのスギの低い木立ちにも助けられてエキゾチックな高山湿原の景観をもたらしている。その規模はさほどではなく、典型的な高山性湿原群落と比較すると、いくつかの標徴種を欠いてはいるが、ここにみられるヤチスゲ(寒帯、亜寒帯気候下に発達する湿原の代表的な植物で、おそらくここが日本列島における南限地であろう)、モウセンゴケ、ミズゴケ類(ここではオオミズゴケとヒメミズゴケがある)の結びつきは中部地方以北の高山性湿原群落にもしばしばみられるものである。断定的なことは今後の調査にまつべきであろうが、おそらく比良山系にみられる湿原群落と共に本邦高山性湿原群落の南限型と考えることができよう。この湿原周辺にはイワナンシ、イヌツゲ、イヌノハナヒゲ(花)、ヒカゲノカヅラ(胞)、マイズルソウ、ノギリラン(果)のほか、分布上興味深いバイケイソウ(枯)、エゾリンドウ(花)(氷ノ山が南限地)、ツマトリソウ、アカモノ(果)などが見られる。

山頂一帯のネマガリダケはより密生し、上層にブナそ

* ()内の数字は被度を示す。

** 佐々木好之(1964)日本生態学会第11回大会講演要旨

他の高木を欠く切頭群落をつくっている。山頂近くで測定したネマガリダケの1㎡当りの個体数は70本であった。下層にはヒメモチ、ヒメアオキ、エゾユズリハが点在している。このネマガリダケの切頭群落の分布を山頂より眺めると、氷ノ山から一ノ丸、二ノ丸と南方に連なる尾根の、西ないし北西の尾根や斜面にはほとんど見られず、反対の東ないし南東の尾根や斜面に広くひろがっていることがわかる。このことは西ないし北西方向の斜面では冬期の季節風をまともにはうけるために積雪量が少なく、逆に風下側の東あるいは南東の斜面に多量の雪が吹きだめられ、その積雪による機械的な圧力、あるいは生育期間の短縮のために高木層をつくる樹木が育たないことを物語っている。果してどれ程の積雪量がブナの成育を阻止するものなのか興味深い研究課題といえよう。頂上より氷ノ山越側に少し下った所(1480m)に1本のブナがあるが、その枝が南東の方向にのみ伸びていて一種の旗形木となっている。これは氷ノ山の山頂付近の主風、特に冬期の風の方向を示す植物風向計とみることができよう。

コシキ岩の岩場(1445m)のヤマツツジ、ホツツジ、クロソヨゴ、ツノハシバミ(果)、ナナカマドなども風によって、剪定された植込みのように枝葉の先が切りそろえられている。露出した岩上には高山生のクロゴケのほかギボウシゴケ属、キゴケ属の蘚や地衣が岩隙や岩面の小さい凹みに団塊をなしてくっついている。このほか主に高山帯に分布するコケモモ、コメバツガザクラ、ミヤマキンバイ、ヒメイワカガミも姿を見せているし、2、3株のキャラボクの茂みもある。近くの地上をみると、イワダレゴケ、タチハイゴケ、オオフサゴケといった、いずれもハイマツ群落のコケ層を優占する蘚が生育している。やや下方の1430mの地点で亜高山性針葉樹林の林床に多いセイタカスギゴケやウスバカブトゴケを採集した。また1410mの地点ではコウウラクツツジや果実をつけたツバメオモトに出会った。

この付近より氷ノ山越の峠までの兵庫県側のブナ林はネマガリダケを枯らす薬剤を散布した後、焼きはらわれたらしく、昔のうっそうたる林相は、かなり広範囲にわたって焼野原と化してしまっている。焼け跡にダンドボロギクが芽を出していたが、もはや昔日のブナ林にはかえらないであろう。このような一見非常識ともみえる自然の破壊が、やがては山崩れや堤防の決壊をひきおこし、人命の危機にも連なっていることを当事者は知らないのだろうか。

氷ノ山越で鉢伏山にまわるグループと別れ「あずきころがし」のコースをとって下山することにする。峠付近

のネマガリダケ群落の縁辺部にクマイチゴ、ミヤマニガイチゴが旺盛に生育している。また近在の山ではあまり見られないマメグミもある。峠の西斜面鳥取県側にはネマガリダケより背丈が低く、枝が下方から出るヤネフキザサが群落をつくっている。下っていく路傍でヤマジノホトトギス(花)、ミズタマソウ(果)、スマレサイシン、ゴマナ(花)、イヌガンソク、ハリガネワラビなどを見かける。1020mの地点のミズナラの大木にコケ類と共に、ミヤマノキンノブが着生している。

980mの地点に水場があり、小休止する。溪流近くにはシシウド(花)、ギンバイソウ(花)、ジャコウソウ(花)ツリフネソウ(花)、タイミンガサ(花)、ヤグルマソウ、エゾアジサイ(花)、クサアジサイ(花)、ミズタマソウ(実)、ウワバミソウなどの湿生植物が茂っている。やや下方にある地藏堂(965m)の裏のトチノキの大木にはみごとな程多くの果実がついている。この付近の道すがらに、ミツモトソウ(果)、オヒヨウニレ、ヤマニガナ(花)、ムラサキシキブ、シロトダンバ(花)を見る。「あずきころがし」の急な坂道にかかるあたり(約850m)にブナ、ミズナラの混交林があり、林床に日本海要素と考えられるトキワイカリソウが生育していた。布滝を左にみながらさらに下っていくと、ソヨゴ、ナツバキ、ウラジロガンなど暖帯上部の植物が出現し出す。このほかカスミザクラ、アワブキ、カツラ、ニガキ、オニグルミ、サワグルミなどの樹木やカラムシ(花)、ナベナ(蕾)などの草本も目につく。ほぼ700mの地点で八木川源流の河原におりつく。ここからは平坦な山道をたどるが、山麓斜面の所々にケヤキ、エノキの大木が、こんもりと茂っている。午後5時過ぎ福定の宿に帰着し、1日の採集を終えた。

ま と め

氷ノ山の植物的自然を区系分布の観点からみるならば、第1に1510.1mという比較的低い山でありながら中部以北の高山ないし亜高山地帯に分布する植物が比較的多いことと、第2にその地理的位置から当然ともいえようが、日本海側の諸地域に分布が限られている日本海要素に属する植物を多産するという2つの特徴をもっているといえる。一方植物群落的見地から興味深いのは、日本海型のブナ林、すなわちブナ-ヒメモチ群集の典型的な林相が発達していることと「コセイ沼」にヤチスゲ、モウセンゴケ、ミズゴケ類という高山、亜高山性湿原群落の中核ともいえる種組成をもった群落が発達していることである。